



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	ゆかた着装を含むきもの文化学習を軸とした衣生活領域の教育プログラムの開発(審査結果の要旨)
Author(s)	大矢,幸江
Citation	
Issue Date	2018-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2309/150391
Publisher	
Rights	

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

現代のきものは、日常着の洋装化により生活の中で身近なものではなくなり、若者の興味関心が薄れ、きもの文化の継承が困難になっている。また、若者の被服消費のファストファッション依存・短サイクルの消費行動の実態が課題となっている。よって、学校教育で、生徒たちに、きもの文化への興味関心を高め、衣生活における環境配慮意識を育むための教育が必要であると考えられる。

そこで、本研究では、ゆかた着装を含むきもの文化の学習を軸にした授業に、環境配慮型衣生活を学ぶ授業を加えた授業プログラムと、教員研修を合わせた教育プログラムを考案し、授業実践や教員研修後に行った授業前後のアンケート調査の分析により、きもの文化および環境配慮型衣生活を学ぶ学習の有用性や、学習の意義を客観的かつ量的に評価を明らかにすることを目的としている。授業方法としてアクティブ・ラーニングの手法を取り入れ、生徒が主体的に、興味を持って取り組めるように体験的内容を重視した。

授業プログラムでは、生徒の意識形成や身につけさせたい力「知識の理解」「技能の習得」「姿勢や態度」の育成を目指す中で、研究手法として、能力や意識形成に影響する要因を抽出し、これらへの因果関係を量的に評価した。アクティブ・ラーニングによる授業実践の教育効果の検証方法として、量的に評価する方法は十分に確立されていないと思われるが、客観的指標を用いた量的な評価をした点が本研究の独創的なところと言える。

本授業プログラムでは、グローバル社会で必要な能力と考えられる「日本人としての誇りと自信」「アイデンティティの確立」「環境共生意識の確立」も視野に入れ目指す能力として授業展開した。本研究は、現代社会にある課題に関心を深め、常に能動的に学ぶ姿勢を持ち、視野の広い人材の育成につながるという、教育的意義を有している。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究では、きもの文化の継承、環境共生につながる、教員と生徒の意識形成を把握するために研究倫理規定を踏まえ、中学校 5 校、高等学校 2 校の生徒を対象にした調査では、アンケートを実施し、教員対象の調査では、アンケート及び面接を実施した後、データの整理・分析・考察を行った。これまでの調査研究で得られた知見と、本研究がその一環として位置づけられている「きものプロジェクト」の尺度を参考に、アンケートを構成する項目の選定、妥当性・信頼性の検討を加えた。

解析方法は、統計的手法を用い、因子分析から抽出された因子を用いてパス解析を行った。教育効果を向上させる要因を明らかにし、クラスター分析によってクラス内で要因によるグループ分けすることによって、授業効果を細分化して評価した。さらに質的研究においても、自由記述の内容をカテゴリー分けして集計し、テキストマイニングの手法で評価を行った。これらは被服心理学分野では広く認知され使用されている手法であり、妥当な研究手法といえる。

また、教育環境の構築として開発した e-learning 教材の導入によって、授業の最初に製作のプロセス等、全体像の把握を行い、製作活動の見通しなど認知的技能の習得に役立てた。教員への授業支援や個々の生徒にも対応できる、e-learning 教材という有効な方法がとられた。

以上の研究の方法は、授業実践の教育効果の検証方法として、妥当であると考えられる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究の調査では、個人情報保護・研倫理規定を踏まえた調査を実施し、データの収集・統計的手法による分析が適切にされること、および結果が教育現場へ還元され、授業の改善と充実が図られることが不可欠である。そのために調査は授業前、授業後のみならず、生徒の意識変容の経時的変化を捉えるために、実習の途中段階における意識調査も合わせて実施し、データ収集を行った。また、アンケート調査からでは捉えきれない教員の思いについては、面接調査を実施した。調査分析は、大きく2つの視点から行った。1つは授業プログラムの提案に向けた研究として、生徒を対象とした調査を行い、もう一方は、教員の力量形成と意識形成に向けた教員対象の調査を実施した。それらの調査は、統計手法を用いて詳細に分析を行い、効果の評価を適切に行ったことが認められた。以上のように、研究資料やデータの収集と分析は適切になされたと考えられる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究では、学校教育で、生徒たちに、きもの文化への興味関心を高め、衣生活における環境配慮意識を育むための教育が必要であるとし、教員研修および、きもの文化への興味関心を高めるための授業プログラム、衣生活における環境配慮意識を育てる授業プログラムを合わせた教育プログラムを考案した。さらに、その教育プログラムを実践し、効果の検証を行った。その結果、授業プログラムにおいて生徒に身につけさせたい力としての「知識の理解」「技能の習得」「姿勢や態度」の効果と、ゆかたを着装する実践により、生徒へのきもの文化への興味関心を高める効果がすべての実践から明らかとなり、衣生活における環境配慮意識を育てる実践からは、環境配慮衣生活への実践意識、実践意欲の向上が明らかにされた。また、教員に身につけさせたい力として、「授業の有用性理解」「知識・技能の自信」、授業例を知るという「授業実践例の提示」が挙げられた。以上の結論は、客観的な手続き、分析方法に基づいて導き出されたものであり、論理的にも妥当である。今後、学校現場において実践されることが期待され、十分な学術的水準に達していると評価される。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

きもの文化には、様々な生活文化や文化的意義が込められている。日本人はそれらを素晴らしい文化であり、伝統であると捉えている。しかし、家庭や地域社会の中で学ぶ機会や触れる機会の少ない現代生活において、これらの学びを、学校教育で取り組む必要がある。授業を受けた生徒は、ゆかたの着装によってその意識が喚起され、きもの文化を誇りに思い、世界に誇れる文化であると感じる効果、きもの文化の価値を理解する効果が得られていた。文化的な価値を理解できる力は、国際社会において、異文化を理解し、尊重する態度を育むことにつながる。グローバル化する社会で、日本について理解し文化を尊重し、その良さを自ら発信できる人材や継承できる人材の育成が期待されている。本研究の授業プログラムの実践は、生徒に日本の伝統文化への造詣を深める契機となり、将来的には現代社会にある課題に関心を深め、常に能動的に学ぶ姿勢や視野の広い人材を育成することにつながる。本研究成果は、日本の文化の理解と尊重や継承、異文化の理解と共生社会につながる教育プログラムとして、学問的意義が大きいことが認められる。

また、従来の研究ではまだ十分に確立されていなかった、授業効果を量的に検証する方法の確立や、教育環境の構築として e-learning 教材を取り入れた ICT 教育の実践効果も、本研究の成果として認められる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本研究が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に十分に相応しい優れた研究であると評価した。